

「8050問題～豊中市社会福祉協議会の実践から～」

豊中市社会福祉協議会 福祉推進室長 勝部 麗子氏

豊中市社会福祉協議会の勝部です。先ほど拍手が聞こえてきて、そちらにはさぞかしたくさんの方がおられるのだらうと思います。本日はオンラインですが、しっかりとお話をさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

まずもって済生会の皆様方には、私も地元でたくさんの困窮者の支援でご協力いただいております。無料低額診療で支えていただいた方もたくさんいますし、コロナの中で医療現場はとても大変だったのですが、在宅へ帰していくようなところでもかなり連携をいただいています。医療にかかれない人たちがこんなにいるんだという事、先週もシングルマザーになる人、離婚を決めたあとに妊娠がわかった人、お金がまったくなくて病院に行けずにしたものかというお話を受けました。だれでも安心して医療が受けられるかどうかということはとても重要なことで、そこを長い歴史で支えてこられた済生会の皆様にはいつも敬意を感じています。

今日は 8050 問題ですが、私たちの職場はコロナの影響で減収された方々の貸付の現場と化しました。そこで大きく状況が変わってきて、毎日多くの方々の相談を受けるようになり、特に飲食やインバウンド系で脆弱な状況の中で生活をされている方々にたくさん出会いました。そういう方々の中で、もう 80 歳近くなってもタクシーの運転手をしている。そこで家族状況を聞くと、50 代の家族がいる。「この方は？」と聞くと、「いや、家でずっとおりまして」と、引きこもりまでとは言わないけれど、「買い物ぐらいには出られるんだけれど仕事はしてなくてね」などというお話を多くお聞かせいただくことになりました。豊中市の人口は 40 万人ですが、貸付の件数は 1 万 2000 件を超えており、多くの方々をいま現場でサポートしています。

先ほどのお話にありましたように、脆弱な社会保障で、非常に不安定な非正規、あるいは個人事業主のような方々が今回のコロナの中で厳しい状況に追い込まれています。たくさんの借金を背負って、これから 10 年近く返済が始まるわけです。どうやって生きていくのかということを皆さんが口々に話されています。ホームレスも増えています。寒くなると心配で去年もたくさんの方をサポートしましたが、結局受け入れてくれる病院の問題などもいろいろありますので、これからもまた済生会とは連携をさせていただきたいと強く思っております。

さて 8050 問題ということで、このコロナの中で新しく取り組んだ事業があります。これは「豊中び～のび～の」、引きこもりの若者たちの居場所と、いわゆる就労の前にプチバイトができる場所です。若者と言っても 20 代から上は 50 代までさまざまです。

7 年まったく外部とのつながりがなかった男性が、私がちょうど家庭訪問をしたときに家で赤いメダカ、「楊貴妃」という名前だそうです。珍しいメダカを自分の孤独の中で一生懸命繁殖させることをずっとしていました。「び～のび～の」ではだれでも来たら 500 円の活動費を出すことにしているのですが、昔の作業所のようにいろいろなものをつくって売ったり、野菜を売ったりして事業をしているのですが、ちょうどこの楊貴妃が高い値段で売れていることを知って、その男性に「お願いします。私たちの稼ぎ頭になってください」と頼み込みました。そして彼は「そんなに頼むんだったら育て方を教えてあげてもいいよ」ということで社会に出て来られるようになりました。現在は、週に 1～2 回、こういう場所にも出てきて、みんなにアドバイスをするという役割を担ってくれています。すべての人に居場所と役割をどうつくっていくか、この 8050 問題と出会う中でさまざま考えるようになりました。

日本が先進国、OECD の中でトップの内容が、実は社会的孤立の状況です。家族以外の人と話し相手がいないという人の数では日本がダントツトップです。先ほど人間関係の貧困という話がありましたが、人間関係の貧困、孤立によってさまざまな問題が起きる、孤独死が起きる、自殺が起きていく、メンタルの問題が出てくる、さまざま出てくるというところで、イギリスでは 5 年前に孤独担当大臣ができました。日本は今年の 2 月、政府が孤独・孤立担当大臣を配置するという事で初めて社会的孤立の問題に向き合うことになりました。

もっと深刻なのは子どもたちです。孤立を感じている子どもたちが非常に多いという現実です。われわれ社会福祉協議会では、平成 16 年から全国に先駆けて制度のはざまの問題に対応していくという専門職、コミュニティソーシャルワーカーを配置しました。そこで、これまでは高齢、障害、児童、生活保護という制度で人を救うというやり方をしていたのですが、その人の問題、その人の課題から生活を支えていくということで、はざまの問題を聞きながら、その中からサポートをしていく、仕組みづくりをしていくという新しいかたちで、いま現在、断らない相談支援体制ができていますが、その原型となる取り組みを進めてきました。

ごみ屋敷、孤立死、薬物依存、刑余者、ひきこもり、不登校、いろいろな話の真ん中に

社会的孤立が強く感じられることになりました。いま地域共生社会ということと言われるようになりましたが、本当に困っている人は SOS をなかなか出せない。その最たるものは 8050 のような状況の方々に、ここに含まれると思っています。自分が悪い、自分の育て方が悪いと思って、だれにも相談することなく 30 年過ぎ去っていくという方々がいる。自分の問題が問題だと思えないという人たちもたくさんいます。さらには先ほど排除という話がありましたが、排除ではなく包摂へということはこの地域共生社会では目指していきたい。

私たちはこの四つのこと、支えられていた人は支える人になっていける。支えられるだけの人ではなくて、その人にも支えられることがいろいろある。先ほどのメダカの彼は引きこもっているということはあるけれども、メダカを育てて、繁殖させて、そしてこのコロナの中でうつ状態になっている高齢者などにいやしのメダカを配ることができた。支える人になっていくわけです。そしてすべての人に居場所と役割を、こういうことを考えて、現在いろいろな活動を始めています。

全国に先駆けてこの取り組みをしましたが、コミュニティソーシャルワーカー制度のはざま、でもはざまの問題をどこで探すのかということ、住民と協働して探します。地域の中で SOS を出せない人たちを地域の人たちが発見してくれて、そしてわれわれのところにつないで、そして解決できない問題についてはプロジェクト会議をつくってさまざまな仕組みづくりを進めてきました。

いま地域福祉の専門職の中ではいろいろな立場の人ができてきていますが、いずれにしても大事なことが二つあります。一つは、本人に困り感がなかったり、SOS を出せない人のところにはこちらから出向いて行くというアウトリーチが必要だということです。自分で問題を考えて窓口まで来られる人は限られています。それからもう一つがそういういままでの制度で対応できない人たちをさまざま発見していくことになりますから、その方々をサポートしていくための地域づくりをしていく、そういう地域の中のさまざまな資源を開発していくということが求められます。

特にこの 8050 問題に関しては、まず相談をしていく、アウトリーチができる人材や、体制がいままでまったくなかったこと、それからもしも話を聞いたとしてもその人たちが出ていける支援がほとんどなかったというところがありますので、この問題はだれも手をつけることなくここまでずっとやってきたと考えざるをえない状況になります。

さて、本人・家族がいま非常に小さくなっている核家族です。家族の中だけで支えるこ

とができない、だから近所の人たちが支えてくれるかという話ですが、見守り、挨拶程度はできて近所の人が生活支援までするという事は、いまの時点ではなかなか難しくなっています。特に都市部においては地域のつながりは非常に薄くなっています。マンションでお住いの方も増えていますので、自治会はつくらないで管理組合だけというところがいまとても多くなっています。

そこで豊中、大阪では、小学校区ごとに見守りの組織をつくって、配食や安否確認をしたり、サロンをつくったり、何でも相談を行っていくような敷居の低い、相談へ行く手前のところでサポートができるようなつながりづくりを阪神・淡路大震災からあとずっと進めてきました。そしていろいろと問題を発見し始めたときに、次の課題が起きました。地域の人たちは必ずしもストライクゾーンに当てはまるような問題ばかりを探すわけではないということです。

実は地域の中で、たとえばごみ屋敷で 60 代前半の方の問題を探したとしたら、役所の中は縦割りですから高齢者の問題だったら高齢者の窓口、障害者だったら障害者の窓口が受けてくれるけど、60 代前半の方は高齢でもない、障害手帳も持っていない、そして生活保護でもないとなると、対応してくれる人がだれもいない。「そうしたらいったいこれはだれが対応するのですか」と聞くと、「それはごみのことだから環境部に相談してみましようか」という話になって、環境部に相談に行くと、「ご本人はそれをごみと言っていますか」、「本人は宝だと言うてはります」、「そうしたら勝手に捨てるわけにはいかないですよ」という話で、結局発見した人が解決の道筋を全部探すことになる非常に発見が消極的になってしまう可能性があります。発見して掘り起こしたけれども、右を向いて、左を向いて、だれも向いていなかった、埋め戻そうなんていうことになりがちです。

そこで全国で多くの社協がこの見守りのネットワークをつくっていますので、それを全面的に有効にしていくためには発見力と解決力を同時にしていく。解決していく。丸ごと受け止めるというのがこのコミュニティソーシャルワーカーという取り組みでした。

さらに地域だけでは発見できない、事業所による見守りです。たとえば新聞配達の方々が新聞がたまっていないか朝夕覗くということや、配食の業者さんも見守りの一員となってもらってさまざまな問題を発見できる。そしてそれを丸ごと受け止めて、そして解決の道筋を考えていくということを進めてきました。

さて、そんなことをしてきたわけですが、この赤いサンバイザーを被っている方がお住いの地区で 5 年前に事件が起きました。8050 問題の 50 歳の娘さんが熱中症で亡くなった

ところで、奥に 80 代のお父さんの白骨が出てきたということでした。年金詐称問題として、朝早くからこの民生委員のお宅に新聞記者やテレビ局が押し寄せてきて、どうしてあなたの地区のご家庭のことを把握できなかったのかと問われたそうです。

彼女は非常にまじめな民生委員さんでした。一人暮らしの高齢者のところには毎月必ず 1 回以上は訪問されていましたし、二人暮らしの高齢者のお宅も見守っておられました。50 の娘が 80 の親を介護しているのは当たり前の家です。その家を見守っていないからと言って、民生委員に問題があると言われたら、今後民生委員のなり手がなくなるのではないかと泣きながら訴えられていました。

私も確かにそうだと思います。もちろん自治会にも入っておられなかったのですが、この 50 歳の娘さんが知的ボーダーだったのではないかということがだんだんわかってきました。年金を詐称しようとして積極的に考えていたのではなく、父親が亡くなったあとどうしていいかわからなかったと考えたとするならば、この問題はさらに深刻な課題だと考えるようになりました。

そこから始まったのが見守りローラー作戦です。ご近所で本当に SOS が出せなかったり、どこに相談していいかわからない人たちのところをずっと見て回って、何かお困りごとがあれば連絡をくださいということを進めてきました。100 軒ぐらい行くと 3 軒ぐらい問題が出てくる。ここはお二人暮らしだと思いますということで訪問したら、もうご主人は亡くなっていて、家族葬でご近所にはまったくご挨拶がない。このコロナの中でこういうことがさらに深刻化しています。

ここは 80 代の奥さんが一人で暮らしている。話を聞くと食べるものがない。生活困窮だということで、みんなで早速食べるものを持ってきて、どうぞと渡していると、「いやいや、銀行にはお金があります。でもキャッシュカードを差したらカードが戻ってくるようになった。どういうこと?」。実は暗証番号がわからなくなって戻ってくるようになって、銀行の通帳や印鑑はどこにあるかわからない。この方は認知症の始まりだったのです。そういうことが発見されてきます。SOS を出すことができない人たちがたくさんいるということです。

次の家に行くと、女性が出てきて、私たちがこういう相談に対応できますと書いた紙をお渡しすると、引きこもりなどを書いてあるものすごく怪訝な顔をして、「いや、うちは困っていません」とバシッと玄関を閉められた。何かいやなことを言ったかしら、対応に問題があったかなとみんなで悩んでいたのですが、2 日ほどしたら電話がかかってきて、

「本当に引きこもりの相談を受けていただけるんですか。実はうちには息子がいて」と、ああ、こんな問題を抱えている人たちがいるんだということで、そこから支援の入口が始まっていきます。

マンションもご近所付き合いがほとんどない中で、マンション内の家の中で大声で叫ぶ人がいるということで管理組合から相談があって駆け付けると、実は息子が親にお金を無心するという親子の家庭内暴力の声が大きく響いていたなど、SOSを出せない親御さんたちがたくさんいるという現実に出会いました。

こういう問題を地域の中から発見しながら引きこもり状態になっている方々をサポートしていくための仕組みづくりを進めていきました。市の課長さんたちが集まる地域包括ケアシステム推進総合会議で話し合います。その前段のところでは、ネットワーク会議があります。

これは高齢、障害、児童、たとえば保健所もそうですし、消防なども一堂に会して生活圏域ごとに行う会議ですが、ここで、たとえばこれまで 80 の問題は介護の人たちが把握していたけれども、聞いていると奥の部屋に息子さんがいるということなんだけれども一度も出会ったことがない。でも私の担当は 80 の人だからそれだけでいいと思っていたけれども、実は世帯全体で支えないといけない。内容によっては 50 代の息子が経済的虐待をしていると取られると、今度は包括支援センターがその息子さんとお母さんを切り離すみたいなことでこれまで対応してきたわけです。しかし、入口が高齢から入っても家族の中にさまざまな問題があれば、それぞれのところにつないでいく、キャッチしていく。子どもの問題でかかわったけれども、親御さんがメンタル問題だとか、あるいはそこに認知症のおばあちゃんがいる、ヤングケアラーになっている子どもの話が出てくるということもあるわけです。世帯を丸ごと考えていくために、分野を超えた専門職が連携をしていくような会議をずっと行ってきました。ここには地域の住民の方々も入っていますので、地域の見守りと専門職の連携を進めています。

就職氷河期で、多くの方々が出職できないという問題に出会ってることがわかってきました。派遣、非正規が大きく増えた時代です。80 と 50 は、年齢のことだけでも言えることですが、実は 80 の世代はいったいどういう世代かというと、高度経済成長期の世代の方々です。終身雇用でどこかに辛抱して働き続ければ、それなりの年金がもらえるという状況の方々です。時代は成長していつていきますので、貯蓄も倍増していくようなことができる、金利も高い、辛抱すれば成功していくことを体験された、そんな世代で生きてき

た人たちです。

ところが50から下の世代はどうなっているか。非正規、派遣、大量リストラ、こういうことが当たり前になって、いつ、どの時点で自分がドロップアウトされるかわからない、そういうことをたくさん経験していく世代です。特に就職氷河期は、この前の年までは普通に働けた人が、急に働けなくなる。そして派遣や非正規から始まるとなかなか正職には就くことができない。こんなかたちで自分が思い描いていた人生のレールから違うレールに入って、元のレールになかなか進めないということからどんどん苦しんでいっている人たちもいます。この問題は非正規の職員さんたちは過重労働を強いられるということで、ここでメンタルが落ちていく人たちもいれば、また内定などが取り消されて引きこもった人たちもたくさんいる時代です。

高齢期の引きこもりのパターンを二つ考えています。一つは裕福なご家庭で、親が大企業とかで転勤がある家庭、あるいはお医者さんのお子さんなど一定の期待値があるご家庭で育っている方々が、転勤がきっかけで不登校になって引きこもっていく場合や、東京大学でなければだめで何度も受験を繰り返して何浪もしてしまっ、そこから受験意欲がなくなった場合もたくさんあります。われわれのところには、受験に失敗したり、国立大学や有名な私学を最後まで行くことができずに途中からずっと在宅で苦しんでいる人たちもたくさん相談を受けます。就職をしてもそこから今度は人間関係でうつになったり、リストラになったり、介護離職というかたちで仕事をやめているけれども、実のところは苦しい状況の人たちもたくさん見ることがあります。

8050問題では、80の人の年金がある、あるいは経済的な余裕があることで発見をすることが遅れます。親が裕福なほど頼れるすねがある間は、その中で相談に行くことができず、ずっとこの状況が続いているというのが特徴です。孤立をして発見が遅れます。ご近所に同級生がいて、知り合いからあなたのところの息子さん、最近どうしているのと聞かれるのがいやだから近所づきあいをやめる。親せきが法事で集まると〇〇君はどこかの会社に入ったらしい、お宅の長男はどうしているんだと聞かれることが不安だし、そのことになるとまた苦しむから法事に行かないでお金だけ送っておこうみたいなことになりがちです。

もう一つの引きこもりのパターンは、親も困窮していて子どもを学校に送り出すことにもそんなに積極的ではなく、それで家にいる、学習ができない、そして引きこもって親元でずっと一生暮らす。こういう貧困の連鎖になります。

8050 問題は、80 の高度経済成長期と 50 のいわゆる非正規雇用が始まった時代の経済構造の違いのところから生まれた平成の遺産だと感じるところがあります。

私が 8050 問題の最初のころに出会った 30 年の引きこもりの問題を NHK のドラマで紹介しましたので、そちらを見ていただこうと思います。

(VTR)

ということで、厳しい現実ですが、ああいうシーンにたくさん出会うことになり始めました。

80 代のお父さんが私のところに相談に来て、息子の家庭内暴力で困っているというお話を聞いたときに、「家庭内暴力って」と思いながらおうちに行かせていただいたら、50 の息子さんが背中を丸めて向こうを向いて、私に顔を向けることもありませんでした。

「お父さん、どうしていままでだれにも相談しなかったんですか」とお聞きしたら、「いやあ、どこに相談していいかわからなかった。小学校は普通に行けたけれど、中学校から不登校になって高校は単位制で 3 日も続かなかった。そこからいろいろ就職を考えたけれども長続きしなくて、そのうちずっと家にいるようになった」。コップを見せて、「僕たちはね、このコップの中に水がいっぱいたまっているような状態なんだ。動かすと水がこぼれるでしょう。変化をするということが怖いんだ。変化をさせないためにはどうするか」。変化というのは結局そろそろ仕事をしろとか、どこどこのだれだれはどこかで仕事をしているからそこに行ってみたらどうかみたいなことですが、「変化を本人に言いますと本人がいらついて暴れだす。奥さんに殴り掛かる。こんなことが繰り返されるのが怖くて今日まで続いた。明日の続きの明後日、毎日毎日、こうやって先延ばし、先延ばしにしながら気がついたら 30 年経っていた。うちの子は病気じゃないから保健所に行っても病院を勧められるだけだし、そしてハローワークに行けるぐらいだったら悩んでいない」と言われました。

確かにそうです。若くて働けるんだったら働きに行けばいいじゃないかみたいなのがこれまでの考え方でしたが、そこだけでは難しい人たちがいる。そして長く引きこもっている間にはさまざまな二次障害が出てくる場合もあるのですが、本来的にはそのこと自体が問題かと言われると、違う原因があって引きこもっていることもありますので、通院だけしたらいいという発想にならない人たちも多くいるということもわかってきました。

事例 1 は受験に失敗した事例です。この人は京大に行きたかったのですが、阪大に受かった。それで苦しいことがずっと続いて家で引きこもり状態になっていたということです

が、家族会をつくりました。まず同じ悩みを持っている人同士が話し合う場をつくって、育て方の問題ではないということや、親がエンパワーメントされていかないと息子のところまで支援が届かないので、家族が気持ちを強く持てるようにという仲間づくりをしていき、彼はいま仕事ができるようになっていきます。

事例 2 です。強迫性障害の人もたくさんいます。トイレ、お風呂に時間がかかるということ家族を支配してしまう。親子関係が逆転する。お金を無心する。お金を出さないと家庭内暴力をする。こんな状態が続いていました。ここの親御さんはわれわれの家族会のところに来られるようになっていたのですが、私に電話がかかってくる、「もう限界です。この子をどこかの施設に連れて行ってもらうために業者を頼もうと思います」、「業者って何ですか」と聞いたら。4 人ぐらいのマッチョな男性が羽交い絞めにして連れて行ってくれるというような業者に頼ろうとしておられました。

60 万ぐらいかかるとおっしゃっていましたが、そういうことは本人のためにお金を残しておいてあげてほしいと、本人を説得に行きました。本人はとても苦しんでいたのです。トイレに入ると確認作業が続いてなかなかトイレから出て来れないし、お風呂に入ると何回洗ってもきれいになっているかどうかの確認がずっと続いて何時間もお風呂に入って疲れてしまうという状況でした。認知行動療法というのがあるということで、本人と話をし、入院をして治療を受けてもらい、手帳を取って、いまは障害者就労のところで働けるようになっていきます。

事例 3、大阪北部地震がありました。そのときに会った人も、実はブルーシートをかけてほしいということが入口でした。そういう話で行ったら、真っ白な顔をした 50 代の男性で親亡きあと 10 年ぐらい引きこもっている状況の人でしたが、この人もずっと以前から引きこもり状態だったことがわかりました。地震がきっかけでボランティアの依頼をしてこられました。そこから就労支援をして就職につながった人でした。

事例 4、司法試験がうまくいかなかったというパターンの人もいれば、事例 5 は、親亡きあとの引きこもりです。母親に生前、福祉なんでも相談のチラシを地域の人がお渡ししていましたが、お母さんは息子に話すきっかけがなく、いつか本人が見てくれたらと冷蔵庫に磁石で見えるように貼っておられたそうです。その後お母さんが亡くなられて、息子さんは 3 か月ぐらい悩んだと言っていました。そのチラシを持って私たちの相談窓口を訪ねてきてくれました。こういう人たちがいまは生活困窮者自立支援法という制度でサポートすることができるようになりました。

私たちの支援のやり方は、先ほどのメダカの話ではありませんが、アウトリーチをして、本人のできることに、得意なこと、少しやったことがあることなどを聞き出し、その人の得意分野からサポートしていくということで、自己肯定感を高めるような支援をしています。漫画を描ける人が漫画の本を出してくれた。それが NHK のドラマ部の人の目に留まって「サイレント・プア」というドラマになりました。詩が書ける子には詩を書いてもらったり、音楽ができる人には音楽を弾いてもらって DVD をつくったり、農業の応援などいろいろなことをしてもらいます。

「お宅のお子さんはどんなことが得意なんですか」と聞いたら、「いや、うちは漫画も描けない、絵も描けない、何もできないけれど、ただただなぞなぞばかりつくっています」と言われた。「どんななぞなぞですか」と聞いて本人と合わせてもらいました。「どんななぞなぞを考えているか教えて」と言ったら、「何レベルにしますか。1 レベルから 5 レベルまでありますよ」と聞かれて「じゃあ、真ん中ぐらいをお願いします」と言いましたら、「ピストルにそっくりな食べ物は何ですか」と聞かれました。皆さん、わかりますか。答えは「がんもどき」です。彼のとてもユニークな発想がわかってきました。

実は、社会はこういういろいろな発想を持っている人たち、芸術的な発想を持っていたり、アーティストみたいな子たちは、引きこもりの中にたくさんいるのですが、そういういいところがいまの履歴書で、新卒一括採用みたいな社会の中では非常に排除されていくような状況にあります。実は社会を豊かにしているのは、こういう人たちがやさしくて、とても人のことを思いやれたりするような子たちで、こういう人たちが社会から排除されているということが、世の中をいま非常に弱くしているように思います。

タカヤ君は詩を書いてくれるのですが、彼が私のところで初めて出会ったときは、死にたいという詩を何百通も書いていました。いま彼は月に 1 回、私たちの広報誌に社会とつながる詩を書いて送ってくれるようになっています。

ふつう

みんながぼくらにいつてくる

「ふつう」になれといつてくる

ぼくらは「ふつう」になれないのに

ふつうというギブスのせいで

ぼくらはいっぱい傷ついて
ひとりぼっちでないてきた
「かわれ」「かわれ」ってみんながさ
ぼくらにいつてくるけどさ
ほんとにかわらなきゃいけないのは
ほんとにぼくらなの？

ぼくらは「ふつう」にとどかないのに

彼はアスペルガーで人との関係のところで非常に苦しかったと言っています。こんな彼らの気持ちみたいなものを、いま社会に訴える詩を書いています。

困窮者支援の中では、済生会の皆さんとも多くの人たちをサポートしていますが、この中に引きこもりの人たちがたくさん支援の対象として、困窮の恐れがある人たちとして登場してきました。アウトリーチをして居場所をつくり、中間的就労で2時間500円、少しお金を出して自分のお小遣いができると自分でやりたいことを考えて動き出すことができる。まちの中にたくさんの事業所さんに就労の体験をさせていただく場所をつくり、そして就労準備、一般就労、一般就労ができたあともOB会で人間関係をつないでいく。こんな支援が全国に始まりました。

2時間500円で働いている彼らは、いまはまちを支える側になっています。新聞配達をしてくれたり、ミニコミ紙を配ってくれたり、高齢者のお宅の便利屋としても電球交換をしたり大型ごみの搬出をしてくれたりということで支えられていた人は、支え手になり、多くの人に感謝をされることで地域の一員であるということで自信を持って、そこから前を向いていろいろな活動に積極的に参加ができるようになっていきます。

ついには買い物困難地域でお店もスタートしました。ここは買い物をするスーパーが近くにあったのですが、なくなったために皆さんが買い物で困っていました。このお店の店員さんたちはみんな元引きこもりの経験者です。

こうやって引きこもりの背景はさまざまですが、一様に自尊感情を戻していくためにはつながりや居場所が必要であることがわかってきました。障害があるとか、障害の手帳を取ってからでないと居場所に出られないというかたちになってしまうと、やっとながった人たちにまたもう一つハードルをつくってしまうことになるので、年齢不問の居場所、

活動費があればさらにうれしい。

非正規を正職化するだけではやっぱり教育やスキルが追いつかないという労働の教育のところの問題も非常にあります。雇用の創出、外国人労働がいま非常に増えていますが、もっと彼らの活動できる居場所をどうやってつくっていくかを社会全体で考えていく必要があります。履歴書の空欄や転職歴が彼らを追い詰めています。引きこもりは社会的課題であるという啓発をもっともっとしていかないと、自己責任だと思い込んで、ますます相談ができないご家族がたくさんいます。

全国に、たとえば医療の現場で家族の問題を聞いたときにキャッチしてもらって、自分のところの問題ではないけれども、そのことが入口になってサポートができる、丸ごとの支援をネットワーク雇用全体でいろいろな相談機関がつながって対応できることが重要だと思っています。社会参加ができることは権利であるということをみんなが意識していくことがこれから望まれるように思います。

ご清聴、どうもありがとうございました。